

すずき のりお 鈴木 至夫

日本画家

1929（昭和4）年～

1. 経歴・狭山市とのかわり

神奈川県茅ヶ崎町（現在茅ヶ崎市）で生まれる。東京芸術大学日本画科に入学。当初、油絵にこだわったが、日本画教授に褒められたことから日本画に本格的に取り組むようになり、芸大卒業後、日本美術院展覧会（院展）に初入選。中学の美術の教師となり、同窓生の年子さんと結婚。子どもが生まれ、アトリエを探そうと都内から家探しに出て狭山市入間川に住宅を購入し住む。1975年のこと。さらに、狭山市富士見のマンションにアトリエを持った。狭山に住んで43年になる。



「北海道・神威岬灯台と自画像」を背に鈴木至夫氏

2. 主な業績

芸大卒当時は、風景画・人物画を描いていたが、子どもが生まれて家族の絵を描いた。

30代になった頃、芸大時代の恩師から「いままでの画風をつぶすつもりで風景画に挑戦したら」と言われたのがきっかけに、厳冬の厳しい雪景色を多く描くようになった。

学校の冬休みを活かして厳冬の北海道、東北、北陸などを歩き回った。北海道小樽市の日和山灯台を描いた「北海冬陽」（写真左下）など灯台シリーズも描いた。厳冬の漁村にわずかに電灯の明かりが人の生活を示すという「礼文冬晨」など独自の画風を築き上げた。院展を中心に活動、院展奨励賞などいろいろな賞を得ている。日本美術院特待。1975年に紺綬褒章を受章。



一方、ご自分の活動の記念碑的な個展を行っている。第1回は、生まれ育った茅ヶ崎市の茅ヶ崎美術館で2000年に「画業50年鈴木至夫展」を開いた。代表作25点と小下図（こしたず＝作品の制作前につくる下絵図）47点を展示している。第2回は、狭山市の狭山市立博物館で2011年に「日本の四季鈴木至夫日本画展」を開いた。古希を迎え、北海道から鹿児島まで描いた47点を展示した。厳冬の地を回って描いた寂しい漁村など得意の雪景色を中心に展示した。第3回は、2016年に狭山市市民交流センターで開催した「米寿記念鈴木至夫日本百景展」だ。少年時代の戦争体験から描いた「原爆ドーム」と「浦上天主堂柱」を含めた「日本百景」だった。この中には、真っ白な富士山と「富士」の名前が付いた「利尻富士」（利尻山）など12名山、雪深い道をタクシーで着いた灯台をオホーツクの風に吹かれスケッチした「能取岬灯台」など14の灯台、雪の金閣寺など京都、奈良の寺院、日光の「華厳の滝」など4つの名瀑、沖縄のシーサーまであった。

3. 特筆 ～「狭山十景」～

鈴木氏は、「2019年7月に90歳になるので個展の準備をしている」と話す。出展するのは、狭山の風景を描いた「狭山十景」と「富士山」の四季、「北海道の灯台」で合計24点になる予定。すでに「狭山十景」は完成している。個展が開かれたとき、狭山に住んでいる日本画家が描く「狭山十景」を市民はどう見るだろうか。狭山の風景の魅力を再認識するのではないかな。

参考・引用文献 「企画展 画業50年鈴木至夫展」（茅ヶ崎市美術館）
「日本の四季鈴木至夫日本画展」（狭山市立博物館）
「米寿記念鈴木至夫日本百景作品集」（鈴木氏制作）